

◎COP21が政治レベル交渉へ、教皇も強く期待

【CJC=東京、2015/12/07】フランスのパリ近郊で開かれている地球温暖化対策の国連の会議（COP21）は12月7日、閣僚級会合が始まった。先進国と発展途上国の間で温室効果ガスの削減目標や資金支援の在り方を巡って対立が続くなか、双方の妥協点を探る政治レベルの交渉が本格化する。

COP21は、京都議定書に代わる2020年以降の新たな枠組みへの合意を目指し、実務者レベルの作業部会では合意文書の草案がまとまった。

会合の冒頭、議長国フランスのファビウス外相が「残された時間は少ないが、合意するために妥協点を見いだす努力を続けなければならない」と呼びかけた。

教皇フランシスコは11月30日、アフリカ歴訪を終え、ローマへ戻る機中で記者団の質問に答え、地球温暖化を食い止めるのは「今しかない」と警鐘を鳴らした。

教皇は「問題は毎年悪化し、限界に来ている。私たちは自殺寸前の状況に達している」と強い言葉で警告。COP21の参加者らはこの状況に気付いているとし、議論の進展を期待した。

教皇は6日、バチカン（ローマ教皇庁）のサンピエトロ広場で開いた祈りの集いでも、COP21の成功を祈り、「未来の世代のため、気候変動の影響を減らすためにあらゆる努力が行われるべきだ」と述べ、新たな枠組み合意へ向けた決断を促した。

教皇は「貧困と闘い、人間の尊厳を开花させる努力がパリでなされなければならない」と強調した。

教皇は今年6月、地球温暖化について「今世紀にとてつもない気候変動と、生態系の未曾有の破壊が起き、深刻な結末を招きかねない」と警告し、国際社会に行動を呼びかける重要文書を発表している。

エコロジーの神学（1）

基礎編

Overview

- ・ エコロジーを取り巻く問題群
- ・ キリスト教の自然観の変遷
- ・ キリスト教に対する批判
- ・ 「エコロジーの神学」を目指して

エコロジーを取り巻く問題群

エコロジー（ecology）とは何か？

- ・ もともとは生物とそれを取り巻く環境との関係を研究する生物学の一分野。生態学。
- ・ ドイツの動物学者E・ヘッケルが1866年に著作の中で用いたのが最初。
 - ・ オイコス（家）+ロゴス（ギリシア語）
 - ・ Cf. 経済学（economy）←オイコス+ノモス
- ・ 今日では「生態学」にとどまらず、広く「環境保護運動」という意味で用いられている。

なぜエコロジーを問うのか？

- ・ グローバルな課題として
- ・ 地球温暖化、オゾン・ホールの拡大、人工化学物質の拡散、希少生物の絶滅、等
- ・ 「地球に優しく」するため？

キリスト教の自然観の変遷

キリスト教の伝統的な自然観

- ・ 自然理解から**アニミズム**的要素を排除。
- ・ アウグスティヌス「動物を殺し、植物を滅ぼすのを差し控えることは迷信の極みだと、キリスト自身が教えている。なぜなら、われわれと獣と木のあいだには何ら共通する権利がないものと判断したので、かれは悪霊どもを豚の群の中に入り込ませたのであり、また実を結ばないでいる木を呪って枯らしたのである。」
- ・ 自然を支配すべき対象と見なす。

「自然」に対する二つの見方

- ・ 道徳的指標としての「自然」：「**自然法**」(natural law)としての自然
- ・ 野蛮としての「自然」
 - ・ 「黒人のもとでの奴隷制度のありかたからみちびきだせる、わたしたちにとって興味のある唯一の教訓は、自然状態というものが絶対の徹底した不法の状態である、という理念の正しさです」(ヘーゲル『歴史哲学講義』)
 - ・ 自然は人間によって支配されるべき対象。

環境問題の先駆者たち

- ・ 神の信託管理人思想
 - ・ ウォルター・C・ラウダーミルク(1888-1974)
 - ・ 第十一戒「汝、聖なる大地を、忠実なる僕(steward)として神より相続し、世代を次いで、その資源と生み出す力を守るべし」。
- ・ 生命/生態系中心主義：生命あるいは生態系に価値を置く。
 - ・ アルベルト・シュヴァイツァー(1875-1965)：生命中心主義
 - ・ ディープ・エコロジー：1972年にアルネ・ネス(ノルウェー)によって提唱。生態系中心主義

キリスト教に対する批判

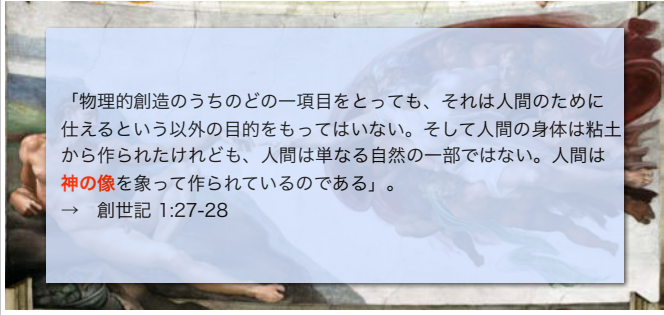
キリスト教の生態学的責任

- ・ リン・ホワイト論争：1967年、*Science* 誌に掲載された下記論文がきっかけ
- ・ リン・ホワイト・ジュニア「今日の生態学的危機の歴史的源泉」(『機械と神——生態学的危機の歴史的根源』みすず書房、1999年、所収)
- ・ 生態学的危機の原因は、キリスト教の人間観・世界観にあると指摘した。

リン・ホワイトの主張



リン・ホワイトの主張



「物理的創造のうちのどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもってはいない。そして人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は**神の像**を象って作られているのである」。
→ 創世記 1:27-28

創世記 1:27-28

神は御自分にかたどって人を創造された。**神にかたどって**創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて**支配せよ**。」

神の像 (Imago Dei) とは？

【参考】小原克博「『神の像』に関する一考察——フェミニズムとエコロジーへの応答」、『日本の神学』第37号、1998年、33-54頁。☞小原克博 On-Line

リン・ホワイトの主張

- ・「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも**人間中心**的な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、**人と自然の二元論**をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」。
- ・「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう」。

リン・ホワイトの主張

- ・「西欧の歴史上の最大の精神革命、聖フランチェスコは、かれが自然および自然と人間との関係についてのもう一つ別のキリスト教的見解と考えたものを提案した。かれは人間が無際限に被造物を支配するという考えにかえて、人間をも含むすべての被造物の平等性という考えをおごとと試みた。（中略）初期フランシスコ会士の、自然のすべての部分の精神的自立性にたいする深く宗教的な、しかし異端的な感覚が、一つの方向を指しているかもしれない。わたくしはフランチェスコを**生態学者の聖者**におしたい。」



「小鳥への説教」
(ジョット、1305年頃)

回勅『ラウダート・シ』 (Laudato Si')

教皇フランシスコは2015年6月18日、「**エコロジカルな回心**」(ecological conversion) を呼びかける回勅『ラウダート・シ』を発表した。



わたしたちに何ができるか、何をすべきかとの問いに対し、社会・経済・政治のあらゆるレベルにおける誠実で透明性のある対話を提案。いかなるプロジェクトも、それが責任ある良心によって生かされていないならば、決して効果的ではあり得ないと指摘する。(5章)

「エコロジーの神学」を目指して

環境問題に対するキリスト教の応答

1. 神の信託管理人思想の展開
2. 自然理解の再解釈
3. 基本概念の拡張
4. フェミニスト神学からの問題提起

1. 神の信託管理人思想の展開

- ・ ジョン・パスモアは『自然に対する人間の責任』（1974年）の中で、キリスト教の伝統の中には、自然の支配者としての人間のイメージばかりでなく、自然の steward としての伝統もあることを示し、「スチュワード精神」（stewardship）の概念を導入した。
- ・ これ以降、キリスト教における議論では、**steward/ stewardship** が人間の自然界に対する役割を示すものとして頻繁に使われるようになった。

2. 自然理解の再解釈

- ・ ゲルハルト・リートケ（旧約聖書学）ら聖書学者は、エコロジーの視点から聖書を解釈し直した（『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、1989年〔原著1979年〕）。
- ・ 自然と人間の関係を問う際に、創世記の冒頭（創造物語）だけに注目するのではなく、他の箇所（詩編、ヨブ記、箴言など）にある**自然描写の多様性**に目を向けさせた。

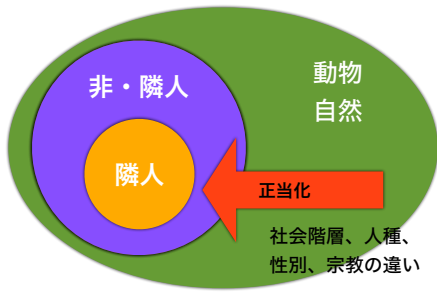
創世記 1 – 9 章

- ・ 「神はこれを見て、**良しとされた**」（1:10等）。
- ・ 「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（2:7）
- ・ ノアの洪水物語：「わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。」（8:21）「あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、**地のすべての獣と契約**を立てる。」（9:9）

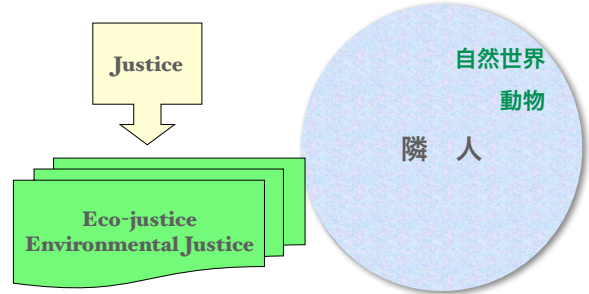
聖書の中の多様な自然理解

- ・ 旧約聖書（詩編8、104、148編）
- ・ 被造物（太陽、月、星、動物、レビヤタン等）と神との緊密な関係を描写
- ・ 新約聖書（ロマ8:18-25、コロ1:15-23、一コリ15:20-28、エフェ1:10）
- ・ 「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」（ロマ8:22）

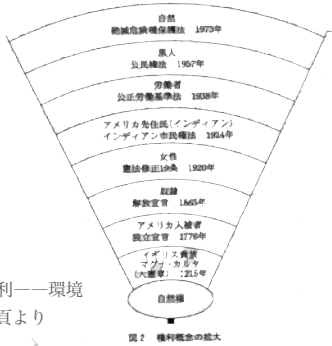
3. 基本概念の拡張



「隣人」「正義」の拡大



権利概念の拡大



ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利——環境倫理の文明史』筑摩書房、1999年、36頁より

図2 権利概念の拡大

4. フェミニスト神学からの問題提起

- ・ エコ・フェミニズム
 - ・ 人間による自然支配と、男性による女性支配の間にアナロジー（類比関係）を見出す。
- ・ 黙示文学的終末論（『ヨハネ黙示録』の最後の審判など）への批判
 - ・ 現在の自然環境は破壊され、新しい天地が到来するという考え方は反エコロジカルではないか。
- ・ 生と死の二元論への批判
 - ・ 「最後の敵として、死が滅ぼされます。」（一コリ15:26）
 - ・ 生と死の不可分性：食物連鎖

【参考文献】

- ・ リン・ホワイト『機械と神——生態学的危機の歴史的源泉』みすず書房、1999年。
- ・ ジョン・バスマア『自然に対する人間の責任』（特装版）岩波書店、1998年。
- ・ ゲルハルト・リートケ『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、1989年。
- ・ ユルゲン・モルトマン『創造における神——生態論的創造論』新教出版社、1991年。
- ・ 富坂キリスト教センター『エコロジーとキリスト教』新教出版社、1993年。
- ・ 笠井恵二『自然世界とキリスト教』新教出版社、1999年。
- ・ ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利——環境倫理の文明史』筑摩書房、1999年。